

生徒指導論におけるキャリア・ポートフォリオ及びビデオ制作活動導入の効果

学校教育・富田英司

1. 授業の概要

筆者は生徒指導論という授業科目を担当し、前学期に学校教育及び特別支援の学生への授業を開講し、後学期には生涯学習群の学生への授業を開講している。本稿は、平成 26 年度の後学期より、新しく構成的手法を導入したことによって学生の認識がどのように変化したか検討した。

この授業ではこれまで、キャリア教育、児童生徒や同僚との一般的なコミュニケーション能力の育成、不適應の理解と対応という 3 つの内容を柱として進めてきた。15 回の授業のうち、3 回程度は小グループ討論に取り組んできた。

今回、後学期の授業からは新しく、構成的手法、つまり実際に作品等を作って学ぶという取り組みを大幅に増やした。1 つは、キャリア・ポートフォリオの作成、もう 1 つは教室の集団指導場面での指導方法を教えるビデオ教材の制作である。

キャリア・ポートフォリオの制作にあたっては、鈴木 (2014) のテキストをベースに授業を進めた。受講生には、サークル、部活、アルバイト、勉強や趣味等好きな領域について、自分がこれまで取り組んできたことについて、それぞれ 1 つのテーマについて 2 ページほど写真や関連資料を貼付してもらい、そこから得たことや思ったこと等について書き込むよう指示した。その他、自分のキャリア上のゴールとビジョンについても記入した。これらの作業に計 3 コマほどを費やした。

ビデオ制作活動は、どの科目、時間、活動でも比較的広く利用できる汎用的な集団指導の技術を自分たちで探したり、考案したりしたものを教員用のビデオ教材として残すというプロジェクトである。テーマ毎に 5 名から 8 名程度のグループになって作業を進めた。

このようにそれぞれ 3 コマほどの時間を必要とする活動を新しく組み入れているため、これまでと比較すると、講義で知識を伝達する量は格段に減っている。

2. アンケート結果

授業に対する反応は、教育コーディネーターが毎学期の終わりに実施している「DP 対応学生認識調査」の結果を前学期と後学期に比較することとした。DP への対応に関する質問項目は以下の通りである。

- DP1A この授業では教育に関する確かな知識を得ることができる
- DP1B この授業では自分の専門分野の知識を得ることができる
- DP2A この授業では教育をめぐるさまざまな現代的課題について理解することができる
- DP2B この授業では教育の現代的課題に対して適切な対応方法を考えることができる
- DP3A この授業では教育活動に取り組むために必要な技能を身につけることができる
- DP3B この授業では教育活動に取り組むために必要な表現力を身につけることができる
- DP4A この授業では自己の学習課題を明確にすることができる
- DP4B この授業では理論と実践を結びつけた主体的な学習ができる
- DP5A この授業では専門的職業人としての使命感や責任感を身につけることができる
- DP5B この授業では多世代にわたって対人関係を形成する力を身につけることができる

表 1 DP との対応に関する評定値等の変化

DP 項目	前学期		後学期	
	1 と 2	3 と 4	1 と 2	3 と 4
1A*	91	21	70	5
1B	65	47	52	23
2A	102	10	73	2
2B**	89	23	74	1
3A*	91	20	70	5
3B	79	32	62	13
4A**	69	42	65	10
4B	78	34	61	14
5A**	73	37	66	9
5B**	58	52	56	19
時間外学習	1.13 (SD = 1.08)		1.33 (SD = 1.14)	

表 1 は、DP との対応に関する評定値と時間

外学習の時間が、前学期と後学期でどのように変わったか比較するためのものである。

評定値は、この授業が DP の各項目に対応した力をつけることができるものになっていると思うかという問いに対して、1: とてもそう思う, 2: ある程度そう思う, 3: あまりそう思わない, 4: DP と関係ない, と設定された。

多くの項目で、前学期よりも後学期において、1 や 2 の回答の割合が増えていることが分かる。統計的な差を検討するために X^2 分析をおこなったところ、下記のような結果が得られた。

DP1A $X^2 = 4.5160$, $df = 1$, $p = .0336^*$
DP1B $X^2 = 1.9894$, $df = 1$, $p = .1584$
DP2A $X^2 = 1.9830$, $df = 1$, $p = .1591$
DP2B $X^2 = 13.1391$, $df = 1$, $p = .0003^{**}$
DP3A $X^2 = 4.0294$, $df = 1$, $p = .0447^*$
DP3B $X^2 = 2.6286$, $df = 1$, $p = .1050$
DP4A $X^2 = 12.1549$, $df = 1$, $p = .0005^{**}$
DP4B $X^2 = 2.6340$, $df = 1$, $p = .1046$
DP5A $X^2 = 10.0462$, $df = 1$, $p = .0015^{**}$
DP5B $X^2 = 8.1724$, $df = 1$, $p = .0043^{**}$

3. 考察

今回の授業では、全ての項目において前学期よりも DP により対応していると感じた学生の割合が増加している。統計的検定によると、DP1A, DP2B, DP3A, DP4A, DP5A, DP5B が有意に前学期よりも 1 または 2 につけた学生の割合が多いことが分かった。これらのことから、キャリア・ポートフォリオや集団指導の方法についてビデオ制作する活動等は学生にとって、DP に対応させた授業を受けているという認識に繋がるものと思われる。時間外学習時間については有意な差が見られなかった。

DP1A に関する結果では、知識をより身につける授業という認識が増えたことを示している。実際には、講義時間が減ったにも関わらず、このような反応が得られたということは、知識伝達の量や時間と知識を得たという感覚は必ずしも連動しないということおかもしれない。あるいは、自由な活動に取り組むことで自分から勉強する機会が増え、その結果知識を得ることに繋がったのかもしれない。

DP2B は現代的課題に対する対応策を考えたことができたかという項目で、1 と 2 の評

定が最も多く得られた。自分たちでビデオを制作する過程で現代的課題に対する適切な対応方法が身につくと学生が感じている事が示唆される。

DP3A や DP5B についてもおそらくビデオ制作をする課程で、教育に必要な技能が身につくと捉えられたり、多世代に渡る対人関係を形成できる授業だと捉えられたのだろう。

他方、DP4A は自己の学習課題を明確にすることができる授業であったという項目であり、自分を見つめ直す作業が多く含まれるキャリア・ポートフォリオの効果が見られたのではないと思われる。

ただし、今回の結果は前学期（学校教育と特別支援が対象）と後学期（生涯学習群が対象）の比較によるものである。そのため、この結果が課程の違いに起因するものである可能性がある。また、今回はポートフォリオとビデオ制作について、どちらがどれほど今回の変化に貢献したかについては実際には不明である。引き続き、比較検討を続けることが求められる。

4. 引用文献

鈴木敏恵 (2014) キャリアストーリーをポートフォリオで実現する 日本看護協会出版会

<補遺>

本稿の分析にはオープンソースの統計解析システム R を用いた。分析のために使ったスクリプトを下記に示しておく。以下は DP1A のみを対象としたものであるため、DP1B, DP2A と他の質問項目についても順次処理する事ができる。

```
kouki
<-read.csv("studentguidance2014kouki.csv",fileEncoding="shift-jis")
zenki <-
read.csv("studentguidance2014zenki.csv",fileEncoding="shift-jis")

tabz <- table(zenki$DP1A)
tabk <- table(kouki$DP1A)

c1 <- as.numeric(sum(tabz[1], tabz[2], na.rm = TRUE))
c2 <- as.numeric(sum(tabz[3], tabz[4], na.rm = TRUE))
c3 <- as.numeric(sum(tabk[1], tabk[2], na.rm = TRUE))
c4 <- as.numeric(sum(tabk[3], tabk[4], na.rm = TRUE))

x <- matrix(c(c1, c2, c3, c4), 2, 2)
chisq.test(x)
```